

ユネスコ国際会議に出席して

——テレビ教育を中心に——

西 本 三 十 二

北極まわりの空路

一九五八年五月十二日から十日間、パリ郊外マルリイ・ル・ロワで「テレビと大衆教育」というユネスコの国際会議が開かれた。わたくしは、五月二日羽田発の北極まわりSAS機で、この会議に参加するためにヨーロッパに向った。午前十時羽田を発った飛行機は、アラスカのアンカレッジに、給油のため一時間ばかり着陸しただけで、五月三日の午前六時コペンハーゲンに着いた。途中、日附変更線を越し、またアリュシアン群島のアツとキスカの島の間と、北極をすぎたあたりで、二度も飛行機の右と左に深紅の入日と盆のような月を同時にながめ、東京からコペンハーゲンまでの正味の飛

行時間は、二十七時間であった。

デンマークでは、コペンハーゲンを中心に、この国の放送事業特にラジオとテレビによる教育放送の実情を視察し、さらにマグリアス国民高等学校を見学した。

五月五日午前十一時、飛行機でコペンハーゲンを立って阿姆斯特ダムに向った。オランダでは、ヘルヴシムにある放送局および学校放送連合会を訪れて、この国の教育放送の実情を視察し、デルフトの陶器製作所、ヘーグの平和宮、国際裁判所、国立美術館等を見学した。

五月七日午後一時阿姆斯特ダム飛行場を発ってブリュッセルに向い、ここでも放送局を訪問してベルギーの放送事業特に教育放送を視察し、ルーベンスやヴァンダイクの絵で知

られている国立美術館を訪れた。さらにブリッセルでは、世界博覧会を見物し、世界各国の科学、技術、産業、文化が、戦後いかに復興し、また発展しつつあるかの一面を目のあたり見ることができた。

五月九日午後二時半、ブリュッセルから、パリの郊外ル・ブルゼー飛行場に到着。パリ滞在の日数も多くないので、その夕方から、NHKの欧洲総局長岡部正孝君の自動車で、凱旋門、ルーブル博物館、ノートルダム寺院、ソルボンヌ大学、プローニュ公園、ヴェルサイユ宮殿など。パリとその郊外で見るべきところを、大いそぎで案内してもらった。また一夕パリ駐在の古垣大使からすばらしい日本料理のご馳走になった。ICU第一回卒業生で、外交官試験に合格し、目下リヨン大学に留学中の川崎晴郎君の健在であることを聴いた。そして十一日夜岡部君の車でパリ郊外マルリイ・ル・ロワの国立成人教育研究所の寮に送りどけてもらった。

ユネスコ会議

十二日から始まった「テレビと大衆教育」の会議には、西

ユネスコ国際会議に出席して

ヨーロッパ側からは仏、英、伊、西独、白、丁、和、瑞西、瑞典、諾、奥、西、の十二カ国、東ヨーロッパ側からはソ連、チェコ、ポーランド、ルーマニア、ユーゴスラビア、ハンガリーの六カ国、アジアから日本、アメリカ大陸から合衆国とカナダ、合計二十一カ国、各国代表合せて約六十人、そのほかに西アフリカから一人オブザーヴァーとして参加した。

テレビは一九三六年イギリスで正式に放送が開始され、それにつづいてドイツ、アメリカ、フランスなどでもテレビの放送がはじめられた。ところが第二次世界大戦の勃発によってこれらの放送は停止された。そして一九四四年、アメリカおよびフランスでテレビ放送を再開、さらにイギリス、西独、カナダ、ソ連でもテレビ放送を再開し、わが国では一九五三年から正式のテレビ放送を開始することになった。現在、世界でテレビ放送を実施している国は、約五十カ国、そしてこの会議には、そのうちの主要な国の代表が参加して、教育的可能性の大きなテレビを、今後の大衆教育に、いかに利用すべきかということについて、世界的視野に立って検討し、協議したわけである。

会議の最初の三日間に各国代表から、それぞれの国のテレビ事情についての報告があった。

世界各国におけるテレビの受信機は、テレビ放送の開始の早さに比例して、普及率も高くなっている。すなわちアメリカ合衆国の五千万台、イギリスの九百万台をはじめとして、フランスの八十万台、カナダの三百万台、西独の百五十万台、ソ連の二百五十万台、日本の百万台、イタリアの八十万台、オランダの二十五万台、ベルギーの二十五万台、デンマークの十万台、東独の二十万台、チェコの十六万台となっている。その他の諸国は国も小さく、また人口も少なく、大体十万以下の受信機しか普及していない。

アメリカでは、大部分のテレビ局は、朝の六時ごろから、夜半すぎの二時ごろまで、一日二十時間ばかり、放送している。ところが、その他の国では、大体、日本のテレビ局と同じように、一週に五十時間くらいしか、放送していない。これらの放送局は、夕方から夜にかけての娯楽番組に重点がおかれ、その番組の製作に追いまくられていて、教育番組に力を注ぐ余裕をもっていない。そこでこの会議で、各国のテレ

ビ教育の現状とその将来の計画等についての情報を交換し、さらにこの大きな教育的可能性をもっているテレビを国際理解の上にとどのように役立てていったらよいかということをし合うというのが、この会議の目的であった。

各国の報告は、アルファベット順に行われ、日本の報告は第二日目に当たった。私は先ず日本の放送教育の発達を歴史的に述べ、さらにテレビ界の概況とテレビ教育の現状を報告した。ついでNHKの岡本学校放送部長が、NHKのテレビによる教育、教養番組および学校放送の内容と将来の計画等について報告した。そして昨年日本で実施した「農村におけるテレビ番組の集団視聴の実験結果」（テレ・クラブ運動）については、文部省で集計した三〇〇ページにのぼる報告書を提出した。

テレ・クラブというのは一九五〇年に、フランスの農村で試験的に実施して、かなりの成績をあげた。そこでユネスコ本部では、日本とイタリアで実験することになり、日本ではNHKと文部省とユネスコ国内委員会とが協同で、一九五一年十月から予備調査、一九五二年一月から四月まで、毎週木

曜日午後六時半から三十分間「伸び行く農村」というテレビ番組を全国から選ばれた六十一の農村公民館や村の集会所で集団視聴し、テレビによる新しい大衆教育の在り方を実験したわけである。

これは実験としては一応成功したものであり、日本の実験は、フランスおよびイタリアと比べてまさるとも劣るものではないが、将来これをどのように有効に展開していくかということは、今後の問題である。

このテレ・クラブ運動の予備段階でつくられた「村にもテレビを」という映画は、第三日の全体会議を終ってから、ユネスコ本部の映写室で、各国代表に披露されたが、大きな関心をあつめた。映画会の直後に開かれたユネスコ主催のカクテル・パーティーでは、殆んど例外なく各国代表から握手をもとめられ、多くの讃辞がよせられた。この映画会では、イギリスのテレビ・ドラマ“Docker's Case”（無実の罪の疑いをうけて獄につながれた一造船工が、友人や献身的な弁護士の方で無罪となるという筋）や、フランスの“If It Were You”という、若い新婚の夫婦が両親とアパートに同居して

ユネスコ国際会議に出席して

いることから起る家庭不和と、友人の弁護士に相談してない貯金と借金で郊外に家を新築して問題が解決するというテレビ・ドラマも上映されたが、日本の映画の方が、映画技術の点でも（英・仏のはキネスコープで画質が劣っていたのは気の毒であった）、また題材や内容の点でもすぐれていたことは、大へん肩身のひろい思いをした。

テレビ・フィルムの国際交換

第四日以後は「番組内容の問題」「テレビ、視聴指導の問題」「教育者とテレビ」「研究調査の交換」等の委員会が開かれて、それぞれの問題について、意見を交換し、協議した。

国際会議の性格から、テレビ番組の国際的交換ということも大きく採りあげられた。私はその委員会で、国際理解に役立つテレビ・フィルムの交換を提案した。これは、ユネスコの会議としては、最もふさわしい議題にちがいないと信じていたのに、これについて各国代表の賛成を得るためには、多くの議論と日数を費さねばならなかったことは、私にとっては、まことに意外であった。

私はこの会議に出てはじめて知ったのだが、テレビ番組用フィルムとの国際交換ということは、それまでに三度も採りあげられたことがあるが、その都度失敗に終わったということである。この問題は、一九五五年に開かれたタンジール会議と、一九五六年のパリ会議と、一九五七年のエジンプラ会議で、それぞれ採り上げられたのであったが、いろいろの事情で成立しなかったという。そしてこれらの会議に出席し、或いは会議の様様をよく知っているヨーロッパ各国代表やユネスコ本部のカンラー・テレビ課長などは、私の提案に対しては、きわめて消極的であった。

過去三回も失敗したのだから、今度こそ成功させなければならぬのではないかと、私は強く主張した。幸にも私は、会議の副議長に選ばれていたのので、各国代表と接触する機会を多くもっていた。その上食卓を共にし、ロビーで雑談している機会などを利用して、私の提案に対して各国代表の賛成を得ることに努めた。

ヨーロッパ各国代表が、テレビ、フィルム交換に余り関心をよせないのは、ユーロビジョンが、成果をあげてきたこと

にもよる。ユーロビジョンというのは、エリザベス女王の戴冠式の模様をテレビで大陸各国に中継放送することに成功したのがきっかけとなって、その後もっぱらヨーロッパ各地で起った特別の出来事や、スポーツやの中継放送が行われてきた。また最近ではブリュッセルの世界博覧会の開会式の模様をヨーロッパ十三カ国に六つの異なった国語をつかってテレビ放送して大きな成功をおさめている。その上、小さい国が国境を接していて、隣の国のテレビを観ることもある。そういうわけでヨーロッパ各国では、テレビ・フィルムの交換は、それほど必要ではないという。そこで私は、アメリカとカナダの代表と連絡をとり、この問題はヨーロッパだけの問題ではなく、世界的視野に立って考えるべきことを主張した。また、オランダ代表が、ユーロビジョンの事務局総長であったので、これとも懇談して私の主張を納得させることにも成功した。

さらに私は、ソ連代表ともよく懇談した。ソ連はかつて「テレビ用フィルムの交換には大賛成で、ソ連では一年に五〇本くらいは提供する」という意味の発言をして、準備ので

きていない国々の代表を啞然とさせたことがあると聴いたからである。ジョン・ガンサーの「ソ連の内幕」という書物で、私はソ連では、スターリン時代には、映画は毎年七本から八本、一九五六年になって八十五本まで製作することができるとなったことを読んでいたので、食卓やロビーでの雑談の中で、こういう話題をもち出して、ソ連代表が会議の席上、爆弾的な発言ができないよう予防線を張っておくことにも努力した。

またテレビ・フィルム交換を実施するとすると、ユネスコ本部のテレビ課の事務が、それだけ増大することになる。ところが差しあたり、それに必要な予算もなければ、定員ももたないユネスコ本部の意向を考慮して、これが実現について五つの条件を提出した。すなわち

- ①これは一九五九年以降の実施とすること
- ②各機関から提供するテレビ用フィルムは、最低一本として出発し、逐次その本数を増加していくこと
- ③そのフィルムは、国際理解に役立つということだけを条件にして、その内容、用語、長さ等は、それを製作する

ユネスコ国際会議に出席して

テレビ局の自由とすること

④フィルムの使用料、著作権料等は、それを製作するテレビ局において解決し、無料とすること。

⑤ユネスコ本部は、各国のテレビ局から提供されるフィルムの題名とその梗概を印刷にして、各国ユネスコ委員会に送り、フィルムの使用は、各テレビ局間の直接の交渉に委ねること。

すなわちいろいろの意見を以上五つの条件にまとめて、委員会の賛成を得、これを全体会議にもち出して各国代表の賛成を得、各国代表は、これを自国にもち帰って、それぞれのユネスコ国内委員会から、本年十一月開かれるユネスコ総会に提出し、決定されるよう努力するところまでもっていくことができた。

私は、この会議を通して、国際理解ということは、言うはやすくして、行うことの実に困難であることを痛感した。テレビ・フィルムを交換して、国際理解を増進するという原則論については、どこの国の代表も、誰一人として反対するものはない。ところが、これを実施する段になると、それぞれ

の国のおかれている事情によって、簡単には決められない。しかもそれが国と国との問題となると、いっそう問題が複雑となる。世界平和の理想を語ることは、やさしい。しかしこれを実行することは容易ではない。しかしこれは実行されなければならぬ重要な問題である。それについても、テレビ・フィルムの国際的交換ということは、国際理解のために、世界平和への手がかりとして、一日も早く実現することを、私はユネスコの会議に出席して、いっそう痛切に感ずるようになった。

パリからロンドン

われわれが、ユネスコ国際会議でマルリイ・ル・ロワに滞在中、パリでは政変があり、フランス政界は危機にあるとさえ言われた。すなわち小党が分立し、各政党は離合集散つねなく、殊にアルジェリア問題をきっかけにしてフランスの政界は拾収がつかなくなつて、ガイヤール内閣が倒れた。そこでコティール大統領によって任命されたフリムラン首相は各党にわたりをつけて、内閣を組織することに努力したが、政党間

の駆引に翻弄されて組閣が行きなやみ、アルジェリア駐屯軍の反乱となり、ドゴール將軍の引き出しが策されるという騒ぎとなった。そして万一の場合をおそれてパリでは非常事態制が宣言され、重要な政府機関や施設の前には、警察の自動車隊が駐車して警戒にあたるという物々しさであった。しかし巴里人は意外にも平静で、市民生活にも特別の緊迫感がなかった。会議中にユネスコ本部を訪問し、セーヌ河の舟あそびに招かれ、オペラやコメディ・フランセーズに行っても政変による不安は感ぜられなかった。また会議後、フランス国立教育研究所や、小学校での放送教育の実際を参観し、またテレビ局や通信教育の事務局を見学する場合でも、何一つ不便を感ずることはなかった。新聞やラジオなどでも、フランスの政情については、検閲が行われていたためでもあるが、特別に取りたてて大きく取り扱っている様子がなかった。

ところが海峡を越えて、イギリスに渡ってみると、ロンドンの新聞では、フランスの政変に関するニュースを、毎日のようにトップ記事にして、大見出しで取り扱っているのは、驚かされた。これはその後大西洋を渡ってアメリカに行

き、ポストンやニューヨークの新聞を見た時にも感じたこと
で、フランスの政変は、フランス国内よりは、国外におい
て、意外にも大きく取り扱われていた。ここにも現代社会に
おけるマス・メディアの在り方について考えさせられること
が多かった。

五月二十四日、パリからロンドンに飛んだ私は、NHKロ
ンドン特派員吉田正君に迎えられ、吉田君の自動車でロンド
ンの目ぬきの通りや、重要な建物のあるあたりを一と通り案
内してもらった。翌二十五日は Whit Sunday その翌日は
Whit Monday と、三日つづきの休みで、かたくなるしい見学
は一切できない。そこで日曜日は吉田君の車で、キュー・ガ
ーデンとウインザー宮に案内してもらった。そして月曜日に
は早朝から汽車でオックスフォードに行き、東大を出て哲学
研究のため留学中の石黒英さんに大学を案内してもらい、午
後はストラトフォード・オン・エイボンにシェクスピアの遺
跡を訪ねあつた。オックスフォード大学は約三十のカレッ
ジから成り立っていて、どのカレッジもすばらしい学寮と庭
園をもち、八百年にわたって大英帝国の指導者たちを教育し

ユネスコ国際会議に出席して

てきた古い伝統は今もなお生きていることに敬意を表すると
共に、明日の世界にこの伝統をいかに活かしていくことであ
ろうかと大きな興味をおぼえた。

二十七日は午前中ブリティッシュ・カウンシルを訪れて、
イギリスの視聴覚教育の視察と、ケンブリッジ大学の見学に
ついて特別の便宜を与えてもらうことを依頼し、午後はイギ
リスの民間教育テレビ局を視察した。本年六月から学校放送
をはじめたばかりで、放送も週四種目で、ほかに一種目再生
放送というにすぎない。

二十八日はBBCを訪問、午前中は主としてテレビ学校放
送、午後はラジオ学校放送と放送教育運動の活動状況等を見
学した。BBCはラジオの学校放送では世界の最高水準を行
くすばらしい活動を展開しているが、教育テレビでは、民間
テレビよりおかれて昨年九月から漸く週五つの番組を放送し
はじめたばかりで、特に見るべきものがなかった。

二十九日は、朝早くホテルを出て、汽車でケンブリッジ大
学に行った。この大学は、オックスフォード大学より百年ほ
どおかれて創立されたのであるが、これとよく拮抗しつつす

ぐれた伝統をきずき、内容外観ともにイギリスの大学の双壁となるにいたった。またブリティッシュ・カウンシルの好意で、一日中雨の中を大学の代表的なところをくまなく案内してくれた、この大学の教育学の大学院で歴史を専攻しているピーター・アレン君の中に、若い世代のイギリス紳士の姿を見ることのできたことも大きなよろこびであった。

三十日は午前中に、BBCで、日本向け放送の録音をし、午後はブリティッシュ・カウンシルの視聴覚部門を見学、またロンドン大学にロワリー教授を訪問した。

三十一日は、国会議事堂、ウエストミンスター寺院、大英博物館、ロンドン塔など、ロンドンの目ぼしいところを大いそぎで見学し、予定した日程を完了することができた。

ボストンとニューヨーク

六月一日午前九時半ロンドンを飛び立ったBOACのDC72機は追風にのって、予定より一時間半も早く、午後四時半ボストン飛行場についた。時差の関係もあって、大西洋横断に要した正味の時間は十時間である。一九二七年リンドバ

ークがはじめて大西洋を横断した時の飛行時間三十三時間にくらべると三分の一に短縮されたわけである。飛行場で、昨年秋以来ハーヴァード大学に留学中のICU教授清水護氏に迎えられて、大学の近くにあるコマンダー・ホテルに案内される。夕方、ボストン大学教授で、一昨年ICUでフルブライト教授として経済学を講じていたヴァーヘーシ博士が、夫人同伴ホテルに来訪、夜おそくまで語り合った。

六月二日は午前中、ヴァーヘーシ教授の自動車で、コンコルドにドライブした。途中、独立戦争の際、見張り人として活躍したポール・リヴィアの記念像のある広場に立寄り、若草物語りのオルコットや、ナザニエル・ホーソーンに住んでいたという家の前を通って、コンコルドの哲人エマソンの旧宅を訪れた。この家は牧師であったエマソンの祖父の建てた家で、エマソンが「自然論」その他多くの書きものをした書齋その他がそのまま保存されている。さらにソーローが愛したというウォルデンの森と湖を訪ねて、正午すぎケンブリッジに帰った。

昼食後、清水教授と二人で、アンドーヴァーのフィリッ

プ・アカデミーを訪問、その視聴覚施設などを視察した。このアカデミーは、百年の歴史をもち、卒業生は有名な大学に進み、それぞれ社会的に活動し、今では主として卒業生の寄附金によって、年々にその内容を充実している、すばらしい私立学校である。

六月三日午前中にボストン大学を訪問してその教養学部と School of Public Relations and Communication Arts という新しくできた学部を見学し、さらに MIT (マサチューセッツ工科大学) と、その近くにつくられた新しい講堂と教会とそして WHGB という教育テレビ局を訪問した。午後にはハーヴァード大学に英語教授法のリチャード博士と教育哲学のウーリッヒ博士を訪ね、大学の図書館、博物館等を見学した。ウーリッヒ博士は、健康状態がよくなれば、来年の九月には ICU に往く予定にしているとのことであった。

六月四日は、朝早くからボストン博物館に出かけて、岡倉天心がフェノロサと協力して創設したという東洋美術部門やドイツ人のつくったすばらしいガラス製の植物標本などを鑑賞し、午後はロングフェローの旧宅を訪れ、大体ボストン、

ユネスコ国際会議に出席して

ケンブリッジでの予定の日程を終えて午後四時ボストン飛行場発ニューヨークに向った。

ラ・ガーディア飛行場ではコロンビア大学に留学中の ICU の都留春夫君と、NHK アメリカ総局長平野俊助君に迎えられる、インターナショナル・ハウスに案内された。これから九日間のニューヨークでの日程もまことに忙しいものであった。

六月五日の朝早くキルパトリック博士夫人をそのアパートに訪問の後 JICU 財団を訪問、午後二時からチャーマン夫人のアパートで開かれた Women's Planning Committee に出席、ICU を支持する多くの婦人たちに会った。その中には、ICU の第一回卒業式に出席のため来日した多くの婦人たちが、一年間 ICU に在学して現在ニューヨークで勉強している露木夫人や九月から ICU に来るワイズ博士夫人もいた。ここで私はもとめられるままに私の出席したユネスコの会議についての感想を述べた。夕方キルパトリック博士を病院に訪ねて、二時間ばかり話し合った。博士は咽喉にすこしばかりの障害があったが、数日の静養で大体回復したので、

明朝退院とのことであった。

六日朝再びJICU財団を訪問、ついでフォード財団とアジア財団を訪問し、午後四時国連で映画部のシルク女史に会い、国連の視聴覚活動と映画の国際交換についておそくまで話し合い、火曜日に再び来訪を約して別れた。

七日はコロムビア大学の Teachers College の訪問に一日を予定しておいたのであったが、春の学期と夏の学期の間の休暇にあたっていて、しかも土曜日のためでもあって、どの教授にも会うことができず、ただキャズウェル学長を見舞っただけで宿舎に帰って日本への通信を書くことにした。するとキャズウェル学長の次男で、プリンストンの大学院で勉強しているアレン君が電話で、ジャーシー・シテイからニューワークの方にドライブしないかと誘ってくれたので、夕方キルパトリック博士夫妻から晚餐に招かれているまでの時間を利用して、ドライブにでかけた。夜は、十時すぎまでキルパトリック博士夫妻と、雑談「ライフ」が採りあげた「CRISIS IN EDUCATION」を中心に、よもやまの話をした。翌日は、リヴァーサイド・チャーチの朝の日曜礼拝に出て、三年

ぶりにムンスターバーグ教授に会う。日本の陶器に関する書物を完成するために、近く再び東京に出かけるということであつた。午後は、久し振りにタイムス・スクエアからタウン・タウンを散歩ニューヨークの変化に驚いた。

九日はコロムビア大学のカーク総長を訪ねて、卒業式に招待を受けたがボストンにいて参列できなかった撥揆をし、教育学部を訪れてコーリー学部長を訪問、視聴覚教育のポール・ウィットおよびブルンステッターの両教授と最近の視聴覚教育やテレビ教育について話し合い、教育哲学のフィニックス教授と昼食を共にしながら道徳教育、宗教教育の問題を語る。午後五時キャズウェル学長を訪問、ほんの五分ばかりのつもりであつたが、いろいろと話がすみ夫人も交えて四十分ばかりの会見となつてしまった。体もほとんど快復、数日中にニューハンプシアの夏の家に出かけ、九月からは、大学の仕事をするつもりだということであつた。帰りにゼラルド・クレイグ博士をリヴァーサイドのアパートに訪問して、最近の理科教育についての意見を叩き、七時前宿舎に帰ってくると、ウェンガー教授が、ケントから自動車で洋一を連れ

て二日がかりのドライブで、着いたばかりだという。夕食を共にし、夜おそくまで話し合う。

十日はライフ・タイム雑誌社に招かれていたので、ウエンガー博士と一緒に訪問、そのフィルム・ストリップの試写を見、これに対する批評や意見を述べた。午後は帰国の飛行機の手続きをし、再び国連にシルク女史を訪問、また折柄開会中の中近東問題を探り上げている安全保障理事会の会議の様を見学した。十一日は朝八時、昨年来ユニオン神学校での講義のため神学校の教授アパートに滞在されている齋藤惣一氏夫妻に朝食に招かれ、ついでワイズ博士を訪問、ウエンガー教授の自動車でブルックリンの工業高等学校の八階にあるニューヨークの教育放送局を訪問、マッカンドルー局長以下番組編成に当たっている人びとからニューヨーク市の教育放送について話を聞いた。夕方JICU財団を訪れ、ついでワイズ博士夫妻に夕食に招かれ、夜はキルパトリック博士を訪れて、別れの挨拶をした。

ニューヨークからシカゴへ

ユネスコ国際会議に出席して

六月十二日朝七時、ウエンガーさんの自動車でインターナショナルハウスを立ち、ハドソン河にかかっているワシントン・ブリッジを通過してニュージャージー州に入り、十時すぎプリンストン大学を見学。さらに神学校と百万ドルで新築されたばかりの図書館を訪れ、新しい設備を見る。さらにドライブをつづけてフィラデルフィアに行き、独立記念館に近い街頭で思いがけなくもICU第一回卒業生深井久美子さんに出あったが、翌日ロンドンに立つというので、ゆっくり語り合う時間をもつこともできなかったのは残念であった。アメリカ独立宣言の史跡を見、フレンド派の集会所を訪れ、途中プリンモアとハヴァフォードの二つの大学を見学して、ゲティスバーグに着いたのは、夕やみのせまる頃であった。

南北戦争の古戦場、リンカーンの有名な演説の行われたところ、無名戦士の墓など、今は国立公園の中に採り入れられて、全国から訪ねてくる人のあとがたたないという。展望台からこの史跡も眺められ、またアイゼンハワー大統領の農場も見られるという。しかしアイクが農場に来ている時には、望遠鏡をその方角に向けることを遠慮することになって

いるという。

六月十三日の朝早くゲティスバーグの近くのホテルを発った自動車は、ペンシルヴェニア州から、西ヴァージニア州に入り、さらにオハイオ州にはいつて、この州を東から西に横ぎって、オックスフォードに着いたのが、夜の八時半すぎであった。ニューヨークからの行程八百マイルを越えている。オックスフォードはマイアミ大学のあるところ。この大学の視聴覚教育担当教授、ゼイムス・W・テイラー博士を、ウェンガー博士の後任として、九月からICUに迎えることになったので、その打合せのため、はるばるやって来たわけである。ウェンガーさんと私と洋一の三人が、この晩と翌晩とテイラーさんの家に泊めてもらって、大学の見学やら打合せをする。テイラーさんの家は、百エーカーの農場をもつ大きな邸宅で、夫人に、ジミー（小学四年生）ジャネス（小学二年生）を加えて四人家族である。マイアミ大学は、百年の歴史をもちオハイオ州でも最も古い大学の一つで、AV教室、AVセンター、教育TV局等、その視聴覚教育の内容は充実している。

六月十四日夜は、テイラー夫妻のお茶の会で、マイアミ大学の諸教授、女子大学長ヤング博士夫妻などに紹介され、集った人びとにICUのスライドを紹介した。

翌朝八時半、オックスフォードを立って、正午コロンバスのデール博士夫妻を訪問する。大学の教授食堂で昼食ウェンガーさんと洋一はケントへ、私はデール夫妻に案内されてレッキー・ホープにドライブし、三人で湖畔の山小屋に泊る。小屋には暖房の設備があり、シャワーがあり、食事は娯楽施設や広いロビーや図書室もある食堂ですることになっており、旅のつかれを休めるのにはまことに快適であった。

翌日は途中鐘乳洞や、子どもたちのための夏のキャンプ等を見てコロンバスに帰り、この日から三日間オハイオ州立大学の視聴覚教育の設備、写真、語学教育、理科教育の特別施設、テレビ放送局等を見学、ピヴィス総長に午餐に招かれ、またデール夫妻の好意で十七日の晩餐会では日本でよく知られているヘック教授、政治学の河合教授夫妻等に逢う機会が与えられ、十八日の晩餐会では十月からフルブライト交換教授として東京学芸大学に来るハルフィッシュ教授夫妻、教育

テレビ局長ハウエル博士夫妻にも逢うことができた。

六月十九日はデール博士の自動車で、ケントにドライブし、夜はオーロラ教会の集りに出席、ウエンガー家に泊る。ケントでは総長はじめ教育学部の各教授たちに会い、AVセンター、テープ・ライブラリー、写真室、FM放送局、新しい図書館等を見学、またヴァンキャンペン教授のお茶の会、ウエンガー夫妻の晩餐会で多くの教授に会い、アメリカの教育についていろいろ意見を聴くことができた。またケント大学では、大学院学生のために、日本の放送教育および、ユネスコの「テレビと大衆教育」の会議についての講義の約束を果した。なお比較教育学のリード教授は、全米比較教育学会の事務局長を兼ね、来年日本で世界教育会議が開かれるのならば、会員と共に大挙これに参加したいと熱望していた。

六月二十三日朝早くウエンガーさんの自動車でクリーヴランドに向う。クリーヴランドの教育庁に教育次長レベンソン博士を訪ね、ラジオおよびテレビ教育について話し合う。クリーヴランドでは、三つの商業テレビ局の電波をつかって、極めて小規模に週三回三十分ずつ、成人教育に役立つ番組、

ユネスコ国際会議に出席して

青少年教育向の番組、および市民に教育を理解してもらうための番組を提供しているだけだという。「ラジオの学校放送に似たものを、テレビでどうして実施しないのか」という私の問に対して、クリーヴランドでは、生徒一人について、ラジオの学校放送のために一ドル、視聴覚教育充実のために一ドルを毎年予算に計上しているが、教育テレビとなると一層経費が嵩むし、UHFのテレビ放送では、普及も覚束ないから、ここ当分教育テレビを実施する計画はないということであった。

午後四時ウエンガーさんに見送られてクリーヴランド飛行場を出発、ミシガン湖を横ぎって、一時間たらずでアンナーバーの飛行場に着く。ミシガン大学に留学中の杉山貞夫君とICU英語科の小林栄智君とに迎えられて、小林君のドライブする自動車で、ミシガン大学のキャンパスを案内してもらい、宿舎パウンド・ハウスに落つく。夜は杉山君の家で、小林君と留学中の保科洋子さんとで、杉山洋子夫人の日本料理のご馳走になる。

六月二十四、五、六の三日間はNETRC (National Edu-

ational Television and Radio Center) とミシガン大学のAVセンター、フィルム製作部の見学に費した。NETR Cは、アメリカの教育テレビ局に教育フィルムを提供するために一九五三年設立されたもので、ここでつくられたフィルムを調査して、日本にもってくる工作をするのが、今度の渡米中の大きな仕事の一つであった。このことについては別の機会に詳しく報告するつもりである。

シカゴからハワイへ

六月二十七日、杉山君に見送られて、ウィロー・ラン飛行場を発ってシカゴに向う。シカゴ飛行場からタクシーでミシガン湖畔の産業博物館の中に設けられているWTTW教育テレビ局を訪問。私の来着を待っていてくれたフェダーソン氏にうながされて、ジュディス・ウォーラー女史から午餐に招かれていたというので、同氏の車でパラダイス・ホテルに行く。ウォーラー女史はNBCにあって、教育番組を長年担当し、ノースウエスタン大学にラジオ講座を開くのに協力し、今ではニューヨークに事務所のある国際ラジオ番組交換

連盟の推進者となっている。私がパリで教育テレビ・フィルムの国際交換の実現に努力してきたことを非常に興味をもって聞いてくれた。午後二時半WTTW局に帰り、五つのシカゴ市立短期大学と協力して、働きつつ短期大学の課程を終えようと努力している多くの青年男女にテレビを通してより多くの教育の機会を均等に与えようとしているシカゴ教育テレビ局の実際を見学した。フェダーソン氏は、ノースウエスタン大学のマス・コミュニケーションの講座を担当しつつ、このWTTWの教育番組編成の責任者となっている。夕方同氏の車でミシガン湖畔をドライブしつつネルソン氏夫妻の家に送ってもらったが、その車中で今後のテレビ教育の可能性や在り方について話し合ったことは、今も忘れられない。

六月二十八日はネルソン氏の案内でエヴァンストン・ハイスクールを訪問、クローズド・サーキットによるテレビ教育の実際を見学、高等学校の理科やタイプライターの教授にテレビが能率をあげていることをまき、ここにも教育テレビの大きな将来性のあることを知ることができた。二十九日は朝のオヒア飛行場出発の飛行機に座席が得られず、午後三時

ッドウェイ飛行場から飛び立ってサンフランシスコに向った。飛行時間正味七時間であったが、時差の関係でサンフランシスコ時間の午後八時、まだ薄あかりの飛行場に着陸。直ちにバスでサンノゼに行き、ゼイムス・ブラウン博士の家に泊る。

翌日はサンノゼ大学を訪問、教育テレビの施設を見学した。この大学では、教生指導のために、テレビを活用していることで有名である。すなわち市内の小学校三、中学二、高等学校一、合計六つの学校に教室からテレビ放送のできる施設をし、六週間の教生指導のうち、最初の三週間は、小・中・高校の教室から送ってくる実況を、大学の講義室に中継して、教授附添いでこれを観察させる。この三週間のテレビによる観察を終えた後、あとの三週間は実地授業に充てるというのであって相当の効果をあげている。午後は夏期大学の社会科学教育研究のセミナーで“*What California Children Should Know About Japan*”について一時間の講義を行った。それを終つて、ブラウン教授の自動車でスタンフォード大学にドライブし、イリノイ大学から移つて、この大学で *Institute for Behavioral Science* の所長をしているシュラム教授を訪問して

マス・コミ調査についての意見をきき、ついでクエリン教育学部長に会つて、現代アメリカ教育について率直な意見を叩いて見た。夕方サンフランシスコのヴィクトリア・ホテルに宿をとつた。

七月一日と二日はアジア財団を訪問、ヨーロッパおよびアメリカ各地で見ってきたテレビ教育の実情に基いて日本のテレビ教育の問題について話し合い、NETRCのフィルムを日本にとりよせることについて協力をもとめた。七月三日パークレーのカリフォルニア大学に二年前ICUで歴史を教えたヴァン・ノストラン教授およびアジア財団の東京代表をしていたブラウン教授を訪問、昼食を伴にした後、午後三時サンフランシスコ発の飛行機でホノルルに立った。

ホノルルでは、ハケット未亡人を訪問、ロイヤル・ハワイアン・ホテルで二泊して旅のつかれを休め、七月五日夜ホノルル飛行場を發つて七月七日朝十時羽田着、帰国。

おわりに

こんどの旅行は、五月二日羽田発北極まわりでヨーロッパ

に飛び、アメリカを経て六十六日目に帰ったわけである。この六十六日間に世界一周の短い旅行中、コペンハーゲンではNATOの会議があり、ブルュッセルでは世界博覧会、パリではフランスの政変、ロンドンでは一カ月以上に及ぶバスのストライキ、アメリカでは大統領補佐官シャーマン・アダムスの収賄嫌疑や教育界ではソ連のスプートニクに刺激されてアメリカ教育の危機が雑誌ライフに連続五回にわたって採り上げられたことから引き起った教育論争等、世界の各地では、実にあわただしい動きが展開されていた。

ここではこれらの問題と、それから引き起される教育上の問題について突込んだ観察や批判を記すことはできず、通り一ぺんの紀行文に終り、またICU関係の人びとの消息を伝えることに多くのページをとりすぎたきらいがある。この紀行文のほかに雑誌「放送教育」六月号、七月号、八月号および視聴覚教育研究集録第五集と放送教育研究集録第四号に載せた報告を合せ読んでいただければ幸である。

第四号目次

研究論文

民主教育の基本理念としての

人間尊厳について……………小島軍造

人間形成のキリスト教的基礎……………秋田 稔

―ペスタロッチの

「隠者の夕暮」をめぐっての一考察―

森有礼における教育人間像……………武田清子

―「個人」と「国家」をめぐって―

自叙伝にあらわれた疎開の経験……………岡部弥太郎
牧とも子

協同と競争について(其の二)……………古畑和孝

日本人の価値指向に関する研究(一)……………原 喜美

「クラックホーンの価値指向理論と

その日本の農村社会における適用」

× × ×

新学制発足当時の回顧と今日の問題……………日高第四郎

所 報